支援する宗教者

3・11 絆 心を紡ぐ旅

サンガ岩手代表 吉田律子（よしだ りつこ）

未来を信じ　心をつなぎ　共に生きよう

サンガ岩手は災害支援活動・傾聴ボランティア・心の相談室などの活動を行い、心の伴奏者として活動していきたいという願いのもとに設立されました。

サンガとは人が集まり繋がるという意味があります。傾聴・心のケアを重点に一人ひとりに向き合い寄り添いながら、未来を信じ心を繋ぎ、共に生き抜くことが「サンガ岩手」の願いです。三月一一日、巨大地震は想像を絶する大津波となって東日本沿岸に襲いかかり、大きな爪痕を残しました。大津波はすべてを持ち去り、日々の生活が営まれていた町は一面ガレキの山と泥と海水に覆われた地へと一変しました。私は言葉も出ず、茫然と立ち尽くし、ただ手を合わせることしかできませんでした。人の世は移りやすく、人の命は有限でありますが、愛情・執着の絆で結ばれて生きようとしているのが私たちです。一大事の震災を縁として、思いやりと支え合いを共有・共存し、対話し続けることが明日への一歩となると思い、災害ボランティア「サンガ岩手」を立ち上げました。

あの震災から一年八ヶ月が過ぎ、いまだ復興の光が見えない今、目をつむると走馬灯のようにあの日々のことが甦り、凍りつくような気持ちになりますが、今日まで全力疾走で駆けた道を訪ねてみたいと思います。

あの時、居ても立ってもおれず、泣き崩れて寒さをこらえている人の傍に行き、背中をさすってあげたい気持ち一杯で被災地に一歩足を踏み入れました。傾聴ボランティア、供養、遺体安置所回り、読経、避難所での声掛け、支援物資配給、炊き出しと、今必要とされていることに関わりました。千年に一度といわれる大津波は甚大な被害をもたらし、爪痕はあまりにも深く、町は壊滅、ガレキの山!!

僧侶の方々は全国から集まり、節目節目の四十九日・百か日・お盆・一周忌・月命日と供養・法要・鎮魂の祈りを捧げました。ガレキの隙間から読経が流れ、献花は色鮮やかに輝き、香がゆるやかに身を包む。安置所には遺族の方々が肉親探しに駆け込んで来ます。棺が整然と並び、遺品がビニール袋に入れられて傍に置かれています。悲しい対面で号泣・叫びが響き、重苦しい情況…。また、遺体が傷んでいるので、確認できないまま、肩を落とし次へと向かう人たちも多かった。入口には、性別・年齢・身長だけの貼り紙がある。

二人の若者が母を探しに来ました。母はルビーの指輪をしていると申し入れて探しましたが見つかりませんでした。実は、身につけていた時計や指輪なども津波の力で外れてしまうとのことでした。あの若者は、母に会えたのかと気になります。

釜石の小佐野体育館では、火葬場に行くのに、お経一巻も上げないでは悲しいとのことで、私は僧衣を着けて読経し火葬場に送り出しました。遺体は傷みやすいので、火葬場は地元では間に合わず、内陸・秋田の方で行った方々が多いのです。また、身元が確認されない御遺体を大槌町の場合、土葬した地域も一部にありました。私の活動も3・11から約三ヶ月間は、犠牲者に対する供養と遺族者への心のケアに追われました。大槌町の場合、四ヶ寺が流されて墓も壊れて崩れたのですが、宗派からの救援・応援のおかげで二千人が集合して合同慰霊祭を行うことができました。

さて、私は3・11から現地レポートを書き、全国の支

援者・有縁者の方々にメッセージを送っていました。その中から一部を、被災地の今として紹介したいと思います。あの時、その日の状況を体感していただきたいと思います。

[現地レポート1]

東日本大震災の爪痕　（平成23・4・11）

この度は東日本大震災の義援金ありがとうございました。

昨晩も震度6の地震があり、3月11日から毎日の余震はやはり不安で一杯です。

皆様の気持、思いやりを被災者の方々へ心を物資に変えて生活支援として使いたいと思います。

感謝―合掌

私は4月1日から6日まで岩手の釜石、大槌の現地に入りました。言葉が出ずただ茫然と立ち尽くし手を合わせるしかできませんでした。この現実を受け入れるのには大変な心の葛藤とエネルギーが必要だと思います。テレビの映像を見ていると自然への畏怖と凄さがあり、「自然が母なる大地」と信じてきたギャップの大きさを感じます。

一瞬にして町や村が壊滅し、今はただ津波で押し流された残骸があります。まだこの瓦礫の下に2万人とも言われる不明者が埋まっているとの報告です。また死者も岩手では4000人になり、被災者の遺族が裸にされ家も家族も全て失い深い悲しみの時を過ごしています。

私は供養ボランティアとして遺体安置所、骨堂、出棺の時などにお勤めをさせてもらい、現地を飛びまわっています。また避難所には足湯、傾聴ボランティアとして入っています。避難所の人たちとのふれあい、悩み、愚痴などを聞いています。刻々とニーズも変化し、臨機応変に、柔軟に、流動的に対応することはとても難しいですが、それでも現実にこの場を生き抜いている事実があります。

生活物資の調達、配達、こころの相談（聞く）が主ですが、毎日片道3時間の運転は厳しいです。生活への改善、期限切れの移動、医療・経済面等大混乱です。今言えることは衣食住の次は「こころのケア」だと思っています。存在感、居場所、肯定感、必要とされている役割があることの大切さを感じるとともに、人としての尊厳や生きる意味に対して被災した方々から多くのつぶやきを聞いている現状です。しかし、本音と建前で東北人らしくじっと寡黙で我慢しているのが正直なところだと思います。

今、被災地には自衛隊、日本中の専門分野の方々、世界中のボランティア団体が復興に向けて援助の手を差し伸べています。本来の人の生きていく原点がここにあります。この過酷な現状の中でもやさしさや笑顔が見え、支え合い思いやる気持ちが満ちています。

東本願寺本山では御縁忌（親鸞聖人七百五十回忌）を取りやめ「被災者支援のつどい」としました。門主・総長の挨拶、災害支援の活動報告があり、その中の法話に「無慚無愧のこの身にて」の和讃を引き、門徒としてどこに立ち支援するのかの課題のメッセージでした。

親鸞聖人は「十方衆生とは…われらなり」、また「生死無常のことわり…驚きおぼしめすべからずそうろう」と。人の世は移りやすく、人の命は有限でありつつも愛着、執着の絆で結ばれて生きようとしているのが私たちのようです。

永遠に保障されるものは何もない。つまり縁次第だということを、この一大事の震災が私たちに人生の教訓を知らせています。生きるとは変化の連続、有為転変、予測不能であり、近代成長信仰は3月11日に砕かれたと思います。

つまり私は今被災された方々と同座し、思いやりと支え合いを共有共感し対話し続けることが明日への一歩になると思います。

[現地レポート3]

千年に一度の大震災に寄り添う　（平成23・4・25）

この度の震災の支援物資をお送り頂き有難うございました。こちらは未だ余震が収まらず、まさに地震酔いの日々で、眠れない夜が、ますます不安に追い打ちをかけているようです。自然とはなんと無常なものでしょうか。